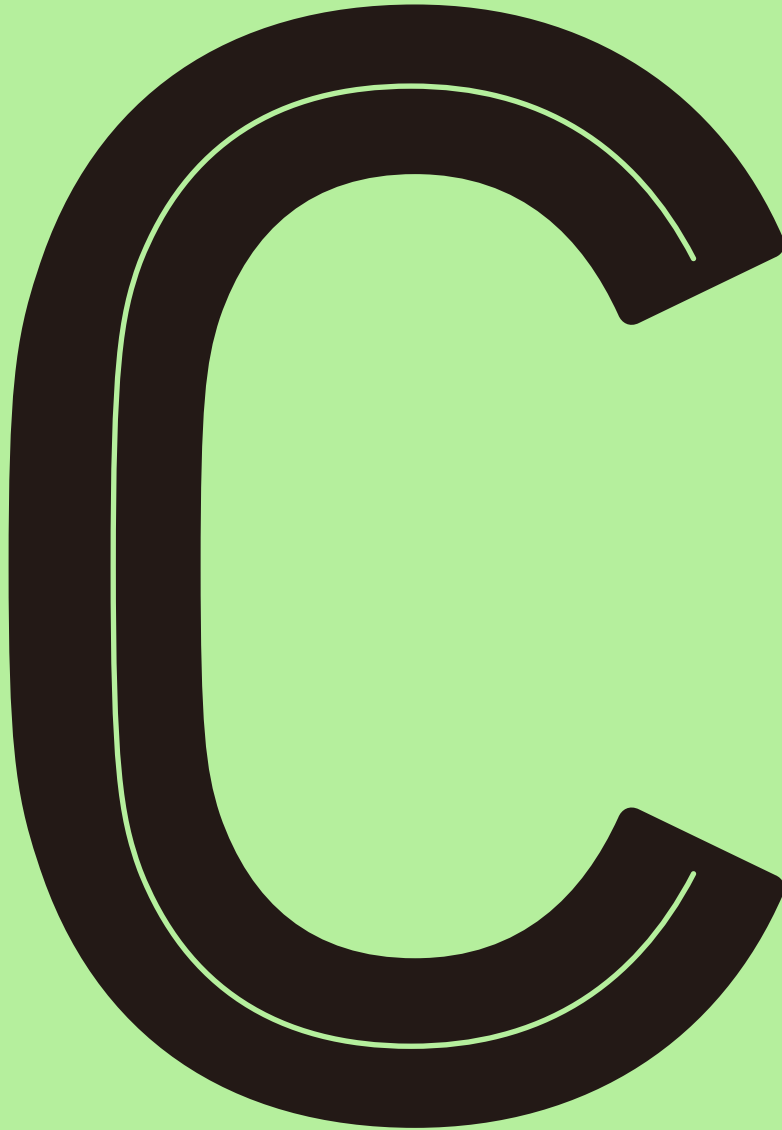




paper



no.010



SHINGO★西成 × 松村貴樹
(ヒップホップMC) (『IN/SECTS』編集長)



オープン北加賀屋



左京泰明 (NPO法人シブヤ大学学長)
斉藤貴弘 (弁護士)



白石晃一
(みんなカーゴ)



SHINGO★西成×松村貴樹

(ヒップホップMC)

([IN/SECTS]編集長)

異なる活動領域を持つ2人による対談企画「CO-DIALOGUE」。10回目となる今回は、大阪市西成区を舞台に、日常をありのままのことで発信するラッパーのSHINGO★西成氏、大阪からローカルを考え、発信するカルチャー誌「IN/SECTS」編集長の松村貴樹氏を招き、それぞれが考える「ローカリティ」についてお話いただいた。

ローカルから学び、還元すること

松村: 谷町6丁目発のカルチャーマガジンとして2009年から不定期発行を続けている「IN/SECTS」ですが、昨年2014年12月15日に最新号を発行しました。実に2年ぶり！ 今号の特集は「日記」で、いろんな方に日記を書いてもらっています。

SHINGO: いいですね、日記。自分では書かないけれど、人の日記って気になります。今回は、なぜこの特集に？

松村: 日記は、日々つづるもの、そして、どこか秘密のものということが言えると思うんですが、そこから、読者も含め、自分たちが共感できる人たちの同時代性みたいなものが出てくれば、おもしろいんじゃないかと思ったんです。

SHINGO: なるほど。日記って読み返さないかもしれないけれど、個人が人前で語りもしないことも含めて、書く瞬間に1日を振り返る。その時々々の出来事や気持ちを整理整頓できるのが良いですね。

松村: 「缶ジュースを買って当たりが出た」「好きな人ができた」とか、すごく個人的なだけけれどもその人にとっては大事。だから日記は、究極のローカルと言えるのではないかと思うんです。

SHINGO: 「IN/SECTS」が考える「ローカル」のとらえ方って、少し変わっていますよね。単に「地域のこと」というわけでもない。

松村: 「ローカル」と一言で言っても、心の距離と物理的な距離があって、国籍や世代、性別などで分けることのできないものもあると思っています。さっきSHINGOさんが整理整頓とおっしゃっていましたが、編集者という職業柄、整理・線引きし過ぎてしまうことがあるんです。心の距離なんて見えませんから、雑誌のなかでそれをどう表現できるかがポイントだなと、いつも考えています。

SHINGO: 俺の場合は、西成でずっと活動をしているし、ごく自然な感覚でこのローカリティ=流儀みたいなものを受け入れつつ、道のないところを切り拓いている感じですね。あるいは、道端に落ちているタバコを地道に拾い歩いていくイメージ(笑)。

松村: 西成ならではのと思うものって、どんなものですか？

SHINGO: 俺は高架下にある家賃4,100円の長屋で育ちました。長屋では、これまで10何年間、隣りの家とご飯が同じなんですよ。向こう三軒両隣ではないですけど、例えば、みかんを10個買ったならそれを3等分するんです。昨日、お隣りから煮物をもらったから、そのお返しに言うて、それがずっと続いている(笑)。

松村: すごい(笑)！「シェアなんてずっと前からやとるわ」と。

SHINGO: ある意味、年末年始に西成・三角公園で開催した「米カンパライブ」はその延長で、Twitterを通してお願いしたところ、全国各地から1,700キロほどのお米が集まったんです。当日は炊き出しをしながら、俺も無料でライブをしました。本来なら「西成の問題は西成で解決する」というのが俺の考え方の基本だけど、このまちは仕事を探しに全国各地から集まってきた人も多し。なかなか、自分たちのまちだという認識が生まれづらいところなんですけど、俺はまちに育てられたと思っています。その恩返しをしたいから自分のものでも分けるし、自分ができてることで貢献したいんです。

はみ出して広がる力

SHINGO: 2012年に「大阪UP」という地元応援ソングを発表しました。そのミュージックビデオを僕の周りで活動している人に声をかけて、100人近い出演者・スタッフで制作したんです。

松村: 映像を見たほかの地域のラッパーが、地元をテーマに「大阪UP」のリミックス版をつくっているらしいですね。

SHINGO: 「東京UP」や「徳島UP」、果ては大阪の「平野UP」「関大UP」「拘置所UP」といった具合に細分化しています(笑)。あと、お金が欲しい高校生による「福澤UP」とか……、趣旨変わってもうてる(笑)！ でも、それも良いんです。地元を盛り上げるのに「こういうことをしてもいいねや！」というのを、音楽で伝えたかった。



松村: 例えば、小規模な会社という組織を運営する場合、社長とか経営理念とか、ひとつの価値観でどうしても収めようとしてしまう。でも、社会ってそうじゃないし、多様性を許容して、その考えからこぼれてしまっても良いと僕は思っています。だから、多様な展開や、それを許容するSHINGOさんは素晴らしいなど。

SHINGO: 大事なのは、相手を受け入れる愛や情熱、突然派生するものを受け止めるゆとりですね。あとは、行き当たりばったりを楽しむこともそう。俺がおもしろいと感じるのは、例えば、西成の飲み屋で青森出身のおっちゃんに「ライブで青森行ったで」と言うと「俺はその隣のまち出身や」と返してくる。そのちょっと憎たらしい返事に込められている、アイデンティティの見せ方、それを受けて感じるどうしようもない人間らしさ、マンパワーですかね。

松村: すごく重要やと思います。みんな違う場所から来て全然違う存在やのに、知らず知らず一緒にくたんにしがちなところを「どどここやなくてその隣や！」と語る、おっちゃんのゆずれなさ(笑)。その主張によって人の“個”が際立ってくる。

SHINGO: 「大阪UP」を不良が不良なりにつくると、そのまちの人たちが「そんなまちじゃない！」とクレームつけることもあるんです。「SHINGOさん、誰かがあんな歌ってたけど、向かいの洋食屋が美味しいから食べて行って」と地元の人に弁解される(笑)。

松村: もはやメディアですね。音楽好き、ラップ好きを越えて、普通のおっちゃんやおばちゃんらと地元を巡ったコミュニケーションが起こっている状況は、すごくおもしろいですね。

合理性からにじみ出るローカリティ

SHINGO: 西成に住んでいても、正直、西成のことは理解できない。西成でゴミを拾っていると、すぐ後ろでおっちゃんがポイ捨てることもある。でもそこで怒って髪の毛かんだらアカン。それこそ戦

争と一緒にやし。みんな結果を急いで、あらゆる問題に対して「すぐ良くなる」「解決できる」と思い過ぎているんですよ。このまちが良くも悪くも、これだけ多くの価値観を認めてしまっているのだから、週や月単位でもなく年単位で筋を通して気長に頑張っていれば、少しマシになるかなというくらいの気持ちで続けています。

松村: (対談収録前、一緒に西成のまちを歩いていた)路上に広々と布団を敷いて飲んでいる人たちがいましたね。その横にはトイレ。そこにお酒と布団を用意してしまうあたりに合理性を感じずにはおれないですね(笑)。まあ、西成だからこそ成立するというか、これこそ西成ローカルイズムだなんて。

SHINGO: たしかに。地方のライブ後にその土地のやつらと飯を食べていたら、店のグラスが足りなくなって、常連客のグラスを奪って洗って出されたりとか(笑)。そういう地方ならではの、というのはある。

松村: ルールがないというか、画一的にならないから、とても曖昧。でも、そこにこそ人間味が出たりするんですよ。『IN/SECTS』の話になりますが、今号から制作だけでなく自分たちで書店との交渉、販売をはじめました。全国販売ツアー的なことを考えていて、僕らの活動に共感してくれる読者やお店の人たちがきちんとコミュニティを形成して、心理的なローカリティをもとに今後、展開できたらなと思っていて。なので、今回のツアーで訪れる場所のローカリティが持つ魅力を感じ取って、これから先の誌面にも登場させられれば良いな、なんて思っています。

SHINGO★西成
Shingo Nishinari

1972年生まれ。大阪西成区・釜ヶ崎近くの長屋で生まれ育つ。介護福祉施設勤務の傍ら、90年代半ばより西成でライブ活動を開始。2012年、3rdアルバム「ブレない」にて地元応援ソング「大阪UP」を発表。年末年始の炊き出しに使用する米カンパを募る「米カンパライブ」など、ボランティア活動も積極的に行う。

松村貴樹
Takaki Matsumura

1976年生まれ。京都府八幡市で生まれ育つ。デザイン専門学校進学後ニューヨークへ。帰国後、ライター、フリーランス編集者として活動。そして2009年、大阪発のローカルカルチャーマガジン「IN/SECTS」創刊。編集長を務める。「ラッパーから見た大阪は」などイベント多数開催。

オープン北加賀屋 地域の出来事をひらく、伝える

おとなとこどもの 北加賀屋みんなのうえん日記

みんなのうえんの大人・子どもメンバーが綴る農園の日々

L M

国府理 追悼展「Parabolic Farm」
Date 2014.11.16 Venue 北加賀屋みんなのうえん第2農園



町田ローラ雪(4歳)
いろんな花が咲いている《Parabolic Farm》
を描きました。

現代美術作家・国府理さんの追悼展には、国府さんのご友人、ご家族の知人、作家本人を知らない方まで、いろいろな方が来ていただきました。そのなかでも、展示企画のひとつである国府さん作のプランター《Parabolic Farm》のスケッチをされた、とある方のことが印象に残っています。丁寧に時間をかけ、国府さんに語りかけるように描かれている姿から、国府さんの人柄や生前の多くの人に愛されていた様子が伝わってくるようでした。メッセージ付きのものもありました。純粋に作品を見てはしゃぐ子どもたちや野菜のお世話をする農園参加者の方など、多くの人の想いを受け取って育ち続ける、国府さんの作品がもつ力を心から感じる事ができた展示でした。

新美真穂 (Co.to.hana インターン)
奈良女子大学大学院住環境学専攻。農山村での生活や村づくりのあり方を研究中。



北加賀屋のいま

さまざまな分野のクリエイターによる北加賀屋での活動を紹介

B



photo: Ai Nakagawa

NAMURA ART MEETING'04-'34 Vol.05
「臨界の芸術論Ⅱ 10年の趣意書」
プロジェクトミーティング&インタビュー
Date 2015.01.17 Venue クリエイティブセンター大阪(CCO)

30年先を見据え芸術のあり方を考える「NAMURA ART MEETING」(以下NAM)がはじまって10年が経った。NAMでは、すべての活動を映像や文章で記録。今回、同活動の現場であるBLACK CHAMBERで実行委員が活動を振り返り、写真家・港千尋氏が「アーカイブにおける創造性」をテーマに講演を行った。港氏は、「アーカイブの大前提は、すべてを残すこと。後世、そこに新たな視点が増えたとき、別の思考が生み出される」と話す。登壇者によるディスカッションでは、NAMアーカイブの公開方法に話が及び、365日公開し続ける案に注目が集まった。「NAMという出来事を丸ごとスキャンする記録を目指した」というアーカイブに、数百年後、誰がどんな考えを見いだすのか。未来につながる創造の源が生まれつつある。(編集部)

素晴らしきまちかど芸術

公共空間における珍風景を巡る

T字路の証言ミラー



一本道にカーブミラーが立っている。もともとT字路だったことが窺えるが、今は路駐スペースに。トラックからちょうど死角になった高さのせいで何度もぶつけられた跡が残る。その割れた鏡を覗けば、昔あったはずの通りを今も指し示している。

有佐祐樹(MAD荘管理人)
コーボ北加賀屋に住んでいます。グラフィックデザイナー、愛猫家。



おおさか創造千島財団では、芸術・文化が集積する創造拠点として再生が進んでいる北加賀屋エリアを、大阪における創造拠点のモデルケースとして、情報発信/ネットワーキングの支援を行っています。



Pick Up! by Co.to.hana



佐々木愛《Migrating Stories》
北加賀屋駅から直結した千島ビル4F通路にひっそりと佇む巨大壁画。大きく羽ばたく鳥の姿は素材の砂糖によって柔らかな輪郭を持ち、訪れる人を優しく出迎える。「水と土の芸術祭2012」に出品後、紆余曲折を経て現在の場所へ。

2014年9月19日現在

Viewpoint from Overseas

アートのための肥沃な土壌
芽吹く緑に佇む作品、見事に改装された展示空間、私の北加賀屋散歩のハイライトは国府理さんの展示だった。ミュンヘンには空き地や低賃料の物件が少ない。現代美術の評価が低い1980年代、すでに都市の機械工場跡をギャラリーへと改装した私のアートスペースは例外的存在だろう。

イェルク・コプマン
「Lothringer 13 Halle」キュレーター。
ドイツ・ミュンヘンにて活動。
写真家としても作品を多数発表。



- [A] ク・ビレ邸 [インフォメーションセンター] 北加賀屋 2-8-8 quvillezthe.wordpress.com
- [B] クリエイティブセンター大阪(CCO) [複合アートスペース]
北加賀屋 4-1-55 名村造船所大阪工場跡地 www.namura.cc/
- [C] コーボ北加賀屋 [協働スタジオ] 北加賀屋 5-4-12 www.coop-kitakagaya.blogspot.jp/
- [D] おしま絵画教室 [アトリエ] 北加賀屋 5-2-31 www.takayukioshima.jimdo.com/
- [E] 芸術中心●カナリヤ条約 [アートスタジオ] 北加賀屋 5-5-35 canaryconvention.wordpress.com/
- [F] 鞆籠館 [シェアハウス] 北加賀屋 5-5-35
- [G] AIR大阪 (アーティスト・イン・レジデンス大阪) [宿泊施設] 北加賀屋 2-9-19 airosaka.com/
- [H] Co.to.hana (コトハナ) [デザインオフィス] 北加賀屋 2-10-21 www.cotohana.jp/
- [I] 隠れ屋1632 秘密基地 [手づくりメガネ&アクセサリー] 北加賀屋 2-8-9 www.kakureya1632.com/
- [J] CAFÉ DJANGO [自家焙煎コーヒー店] 北加賀屋 1-6-28 カガ第2ビル1F www.django.jp/
- [K] 騒ギニ乗ジテ [ギャラリー・バー] 北加賀屋 1-6-1 カガ第1ビル1F sawaginijoute.jimdo.com/
- [L] 北加賀屋みんなのうえん① [コミュニティファーム] 北加賀屋 2-4-6 minnanouen.jp/
- [M] 北加賀屋みんなのうえん② [コミュニティファーム] 北加賀屋 5-2-29 minnanouen.jp/
- [N] MASK (MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA) [オープン・ストレージ] 北加賀屋 5-4-48
- [O] b (フラット) Gallery [カフェ・ギャラリー] 北加賀屋 2-3-17 flat9gallery.wix.com/flatgallery

※ご見学希望の場合は、事前に Web などで情報を確認いただくか、各施設にお問い合わせください。



リレーコラム つないで見える、人とまちの多彩なあり方

地方公共団体における PPPモデルの開発

左京 泰明
Yasuaki Sakyo



特定非営利活動法人シブヤ大学学長。1979年、福岡県出身。早稲田大学卒業後、住友商事株式会社、特定非営利活動法人グリーンパードを経て2006年特定非営利活動法人シブヤ大学を設立。地域密着型の新しい学びのあり方を提唱。2007年度グッドデザイン賞受賞。著書『シブヤ大学の教科書』(シブヤ大学＝編著談社)、『働かないひと。』(弘文堂)がある。

> 左京さんが選ぶ次のコラムニストは…
西本千尋氏(株式会社まちづくりエディティブ取締役／ストラテジスト)
松戸の街と共に育む「アソシエーションデザイン」、注目しています。(左京)

ダンスを止めさせないために

斉藤 貴弘
Takahiro Saito



個人企業問わず総合的な法律業務を行いつつ、風営法や著作権法など文化芸術振興関係法等のエンターテインメント分野の業務も広く取り扱う弁護士。六本木版倉片町に斉藤法律事務所 saitolaw.comを開設。法的インフラの整備拡充に向けた活動も。

> 斉藤さんが選ぶ次のコラムニストは…
原雅明氏(音楽ライター/レーベルオーナー)
音楽という概念を解体し、実験的かつユニークに新しい音のあり方を発信。(斉藤)

これからの「まちづくり」に求められることとして、間違いなく重要になるのが地方公共団体のマネジメントであろう。

「消滅可能性都市」という言葉もある通り、人口減少などによる税収減傾向は、各自治体を、いかに効率的に公共サービスを行うかという課題に直面させていく。その解決策としてあらためて着目するのがPPP(Public Private Partnerships)、「官民連携」「官民協働」と呼ばれる領域である。

実は「シブヤ大学」は元々、2004年の渋谷区議会で新しい生涯学習事業として提案されたものだった。しかし、既存事業とのあまりの違いから実現に至らず、そこに可能性を感じた民間の有志により、コンセプトを継承する形で設立されたのが現在のNPO法人シブヤ大学である。故にNPOが設立された2006年度より生涯学習事業において渋谷区との連携が継続している。連携のポイントは、同区の人口構成上多くの割合を占める一方、最もコミュニケーションのとりにくい青年壮年層に対し、その

何らかの文化が生まれようとしている瞬間。そこには予定調和などなく、カオティックな昂揚感に包まれた衝動が高い熱量でうごめいている。クラブカルチャーやインターネットの黎明期も、危なかつしいが自由で制約のないクリエイティブな雰囲気とともにあった。そのような黎明期における創造性は法的な規制から離れたところで縦横無尽に発揮される。もっともそんな文化も産業として徐々に成長し、社会的な影響力が大きくなるにつれ、公共性や社会性が求められるようになる。かつてのような無秩序な自由さは許容されなくなり、社会との折り合いをつけるための法規制を受けるようになる。例えば、お金はないが才能だけはある若者の音楽表現だったサンプリングは、ヒップホップがメジャーになるとともに著作権ビジネスに取り込まれて訴訟のターゲットになった。インターネットでのP2Pはニッチな情報の流通に大きく貢献したが、著作権でビジネスをしている者たちの反対にあい逮捕者を出した。多くの文化を生み出す土壌となった

ニーズに即した事業を提供できるという点にある。具体的には毎年約20講座を区から委託を受け開催、各回定員を上回る応募、満足度やリピート率も高い結果となっている。もちろん若者だけでなく、従来からの高齢者層も多数参加しており、満足度も高い。アンケートでは内容以外に「若い世代との交流が楽しかった」という感想を貰うことも少なくない。

こういった連携で培ったノウハウを基に近年は生涯学習以外の分野においても連携がはじまっており、例えば、防災事業では、防災意識の啓発と自助スキルの習得を目的とした「Shibuya Camp」という宿泊型被災訓練プログラムが、2012年度から毎年秋に代々木公園で実施されている。

税収は減少していくが求められる公的サービスは減少しない中、渋谷区での実践を通じ、各地に有用なPPPモデルの開発に努めていきたいと考えている。

クラブカルチャーは風営法によって厳しく取り締まりを受けた。直近では産業革命以降の大量生産の生産手法を構造的に変えてしまう可能性を持つ3Dプリンターや、身体性や行動領域を拡張するドローンに同様の問題が生じている。時代の最先端に行く文化や産業は法律の先を行っていることは多くある。法律は常に後追いである。文化や産業を既存の法律の枠内に合わせようとするのではなく、むしろ法律の方がどんどんアップデートされなければならない。アップデートしなければ新しい文化や産業を開拓する先駆者は常にアウトサイダーとして扱われることになり、創造の芽を摘んでしまう。歴史を見ても、これまで常に時代を切り開いてきたのは、そのようなチャレンジングなアウトサイダーだったように思う。自分のダンスを信じ、何があろうともダンスを止めなかった者たちだったように思う。彼らが自由にダンスを続けられるよう、存分に創造性を発揮できるよう法律をアップデートするのは法律家の重要な使命だと考えている。

TOPICS from CFCO

おおさか創造千鳥財団(CFCO)は、大阪で行われる芸術・文化活動の支援を通じて、地域の新たな価値を創造し、創造的かつ文化的に多様な地域社会の創出を目的として設立されました。

NEWS

01 Multus#3「人生を変えてしまうメロディー」 カント・オスティナート4台ピアノ版 日本初演

2012年からはじまった日本・オランダ共同企画、向井山朋子(ピアニスト・美術家)監修のピアノコンサートシリーズ「Multus」の第3弾。オランダの作曲家シミオン・テン・ホルト作のミニマル・ミュージック「Canto Ostinato」を、日本とオランダの4人のピアニストが演奏。大阪公演は当財団の2014年度スペース助成採択活動。名村造船所大阪工場跡地・ブラックチェンバーの特殊性を生かす空間インスタレーションで展開する、圧倒的なパフォーマンスをご堪能ください。

日時:2015年3月14日(土)15:00 会場:クリエイティブセンター大阪・ブラックチェンバー 出演:[ピアノ]向井山朋子、ゲラルド・パウハウス、鷹羽弘晃、佐藤祐介 [インスタレーション]向井山朋子、ジャン・カルマン 料金/全席自由:前売3,000円、学生2,500円(当日500円増) 予約/お問合せ:torindoinfo@gmail.com Web:http://torindo.org



「Multus#2」

ACTIVITY 2014年度 スペース助成/創造活動助成

01 釜ヶ崎芸術大学 in ヨコハマトリエンナーレ 2014 TAKIDASHI カフェ http://www.cocoroom.org

横浜美術館の前に巨大なブルーシートテントが出現し、炊き出しをはじめた。2日間で1100食。親子井とカレーライス。長蛇の列は横浜コトブキから歩いてきてくれた人々。に、混じる美術館やヨコトリ関係者。館長も警備員や清掃係の人も、アートな人も。立場を超えて出合いなおす。生き抜くための術はここにある。



文・上田假奈代
(詩人・NPO法人ココルーム代表)

02 paperC SPECIAL ISSUE 発行/ vol.010 発行記念イベント開催

大阪・北加賀屋をはじめ国内外のクリエイターや研究者、クリエイティブの状況を発信する、当財団のフリーペーパー「paperC」。vol.010を節目に、ページを倍増したSPECIAL ISSUEを制作します(2015年5月頃発行予定)。また、「paperC」や当財団のこれらを参加者のみなさんと共に考えるvol.010発行記念イベントを5月下旬に開催予定。大阪・千日前の「味園ユニバース」を会場に、多ジャンルの人々がコミュニケーションを交わす集いの場が生まれます。詳細は財団Webサイトにて随時お知らせします。

REPORT

「Open Storage 2014—見せる収蔵庫—」開催報告

2014年11月8日～24日に、当財団が運営する大型美術作品の保管・展示施設MASKにて、収蔵作品群の初公開・展示を行いました。初日と最終日のイベントでは、参加作家によるダイナミックなパフォーマンスが連発し、数百名の来場者を迎えた会場内は熱気に包まれました。今後もMASKは年1回程度、公開展示を行う予定です。

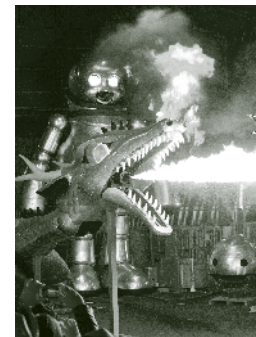


photo: Yuki Moriya

日時:2014年11月8日(土)～24日(月・祝) 会場:MASK(MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA) 出展作家:宇治野宗輝、金氏徹平、久保田弘成、やなぎみわ、ヤノバケンジ

02 第20回日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニパフ'14) https://www.facebook.com/NIPAF13

この分野の国際フェスティバルが世界ではじまってから、すでに四半世紀。表現の自由と連帯を求めて革命前の東欧から火が着いたこの動きは、アジアや中南米にも大きく広がっている。今回も時に奇妙で真剣な、さまざまな国からの計21のパフォーマンス・アート作品をCCOの多様な空間で実現できた。



文・箱田誠二(ニパフ代表)



北加賀屋の発明家たち

2013年1月、北加賀屋に発足した「FabLab Kitakagaya」。必要なものを自分たちの手でつくる、という思想のもと生まれた市民工房の活動を取り上げます。

File 4

みんなカーゴの 白石晃一

現代美術作家の故・國府理さんが原型を発案、FabLabメンバー・白石さんが細部を詰めた、座ったまま農作業ができる木製「みんなカーゴ」。パーツを切り出すCNCルーターの性能、北加賀屋みんなのうえん祭などでのワークショップ参加者の声を反映し、現在も改良を重ねている。「特別な道具や材料を使わずにどこまでつくりやすくてできるかを考えました。本体を支える木枠の差し込み位置に食パン型の穴を空け、手で木枠同士がカチッと止まるよう工夫。オープンデータを使って改良に協力してくれる人も募集中です」と白石さん。使い勝手の良いカーゴを目指し、追求は続く。

みんなカーゴ

2012年、うねの間を移動しながら作業するため設計された椅子。座席のフタを外して農具を取納することができる。

みんなカーゴ ver.2.1



▼作品のつくり方が下記サイトにアップされています！

<http://fabble.cc/shira-ko/minnacargo>



illustration: Rie Mochizuki

Comment

自然と対峙するだけの人為には見切りをつけ、譲り合い寄り合いながら互いの関係を問い直す。その出発点をつくることから、辿り着こうとしている場所がある。出発点の設計思想(ミーム)は、地域の必要に応じて、技術の工夫によって、みんなの手を通じて機能する“乗り物”となって目前に立ち現れる。この市民農園で生まれた道具も然り。野菜と同様に育てる、これからの“乗り物”である。

津田和俊(大阪大学助教、FabLab Japan Network)

paper C No.010
by Chishima Foundation for Creative Osaka

「paper C」は、おおさか創造千島財団が発行するフリーペーパーです。関西におけるクリエイティブな活動を、財団が拠点を置く大阪・北加賀屋エリアから発信しています。

発行日：2015年2月23日

発行元：一般財団法人 おおさか創造千島財団 事務局

〒559-0011 大阪市住之江区北加賀屋2丁目11番8号千島ビル4階

TEL 06-6681-7806 FAX 06-6681-6188

URL www.chishimatochi.info/found/

編集ディレクション & 編集：多田智美 [MUESUM] 編集：永江大 / 和田真文 [MUESUM]

アートディレクション：原田祐馬 [UMA/design farm] デザイン：廣田碧 [UMA/design farm]